

21世紀日本社会の身体・科学技術・フェミニズム

—橋迫瑞穂『妊娠・出産をめぐるスピリチュアリティ』を読む—

田中 重人(東北大学)

1 書評対象書について

まず、本書の目次を確認しておこう。

- はじめに (pp. 3-11)
- 第1章: 妊娠・出産のスピリチュアリティとは何か (pp. 17-46)
- 第2章: 「子宮系」とそのゆくえ (pp. 47-76)
- 第3章: 神格化される子どもたち—「胎内記憶」と胎教 (pp. 77-112)
- 第4章: 「自然なお産」のスピリチュアリティ (pp. 113-145)
- 第5章: 女性・「自然」・フェミニズム (pp. 146-180)
- 第6章: 妊娠・出産のスピリチュアリティとその広まり (pp. 181-206)
- おわりに (pp. 207-212)

「はじめに」は、この本の主題と内容についての簡潔なまとめである。1章は、妊娠・出産と宗教との関係や「スピリチュアリティ」あるいはそれに関連する「コンテンツ」を売買する市場など、この本を読む上での基礎知識が紹介する。2-4章は、現代日本で流通する代表的なコンテンツとして「子宮系」「胎内記憶」「自然なお産」に関する書籍を取り上げ、それらの内容や注目点、言説の特徴、書き手の属性などを説明する。5章は、妊娠・出産を「自然」と関わらせた2人の論者、青木やよひと三砂ちづるについて、彼らの思想を対照しながら、フェミニズムおよびスピリチュアル市場との関係を論じている。6章は、それまでの議論を総括し、結論を述べる。

ページ数を計算すると、1章から5章は29-35ページの範囲に収まっており、似た長さになっている。とはいえ、私の読後感では5章が突出して比重が大きいように感じる。これはおそらく、2-4章が対象書籍の内容や当時の社会状況などを紹介して簡単な腑分けをするものであるのに対して、5章では論理構造を分析して批判を加えるという理論的負荷の高い作業をおこなっているためだろう。

以下では、この本はどのような問いに対してどのような答えを出しているか、ということに重点を置くため、「はじめに」、6章、1章、5章、2-4章という順で見ていく。

2 問いと答え (「はじめに」と6章)

この本全体の問いは、「はじめに」の第2段落に出てくる (p. 3)。

- 妊娠・出産のスピリチュアリティがどのような内容を現代社会に示しているのだろうか
- それが社会に広まった背景として、何が考えられるのだろうか

これらの問いに対する答えは6章にまとまっているが、問い自体が幅の広いものなので、答えもいくつかに分けて提示されている。

第1の問いに対する答えは、つぎのようなものである。

- スピリチュアリティ市場がはじめて妊娠・出産に（ひいては女性の身体性に）肯定的な聖性を与えた（旧来の宗教では妊娠・出産は「ケガレ」に属する否定的な位置づけであったし、近代に入って世俗化が進んで以降は聖性を失い、医療による管理の対象であった）
- 身体性に聖性を付与するための具体的な努力の方法をコンテンツとして提供するものが多い（特段の努力なしに無条件に聖性をあたえるものもある）
- 心身一元論に立つので、身体のケアと内面の安定化は連動するとみなされる
- 身体と日本の伝統や国家が（中間集団を介さずに）直接結びついている
- 母子以外の家族（自分自身の親や夫など）の存在感が希薄である
- 医療に対しては批判的な姿勢をとることが多い一方で、医療イデオロギーと融合していたり、医師が書き手になっていたりするという矛盾がある【後述の議論I参照】
- （日本の特徴として）フェミニズムが切り捨てられている【後述の議論II, III参照】

第2の問いに対しては、つぎのような記述が答えを構成していよう。

- 妊娠・出産をめぐる女性たちの葛藤
- 母子の孤立状況（現実をそのまま肯定するコンテンツ）
- 心地よい消費財への選択的依存
- 産婦人科医や助産婦の影響力争い

3 妊娠・出産と宗教・スピリチュアリティに関する基礎知識（「はじめに」, 1章）

3.1 「スピリチュアリティ」とは

「新霊性運動・文化」(New Spirituality Movement and Culture)……1970年代の「宗教ブーム」のなかで、「教団といった組織を形成せず、個人主義を尊重する人びとに支持されてきた宗教的潮流」(p. 22; 島藺進による)。

「スピリチュアリティという言葉も、新霊性運動・文化とほぼ同じ意味で用いることとしたい。」(p. 20)

「支持者同士が世界観をゆるやかに共有し、凝集性を有している」(p. 24)

3.2 スピリチュアリティ市場とそのコンテンツ

金銭を介してコンテンツ（書籍、映画、雑誌、関連グッズ）をやりとりする市場。コンテンツの大部分が女性向けという特徴を持つ。(p. 4)

本書では、書籍を分析対象としている。中心は2000年以後だが、1970年代の宗教ブームからつながっている潮流であるため、そこまでさかのぼって歴史的な変遷を描く場合がある(pp. 44-46)。

3.3 妊娠・出産と宗教

- ケガレとしての妊娠・出産・月経 (pp. 26-28)
- 近代に入り、女性の身体性が宗教から独立 = 世俗化 (pp. 28-30)
- 妊娠・出産を管理する医療 (p. 29)
- リプロダクティブ・ヘルス&ライツ (p. 30)

4 青木やよひと三砂ちづる (5章)

5章では、「日本社会においては、妊娠・結婚をめぐるスピリチュアリティからフェミニズムが排除されるのはなぜなのだろうか」(p. 147) という問いを立て、ふたりの論客をとりあげている。

4.1 青木やよひ

1980年代のエコ・フェミニズム (p. 151)

- 急速に進んだ「文明化」への批判
- テクノロジーを優先する管理社会からの解放を求める運動
- 「性」を包摂するものとしての (外在的な)「自然」

4.2 三砂ちづる

2000年代のフェミニズム・医療批判 (pp. 156-161)

- お産は、「非常にインパクトのある体験として、女性の人生の核となります。」(p. 163)
- 月経血コントロール
- 布ナプキン
- 身体の内部に存在する「自然」

三砂の主張は、今日の「スピリチュアル市場」と親和性が高い。

「アイディア次第でいくらでもコンテンツを生み出すのを可能にした」(p. 179)

4.3 両者の共通点

- 女性の身体性を「自然」と結びつけることで聖性を付与
- 社会・文化が規定するジェンダーよりも優位にある身体性

4.4 結論?

「母になることを全面的に肯定するということは、フェミニズムがここ三〇年の間で実現できなかった、あるいはしてこなかった出来事でもあった。批判を受けた青木がフェミニズムの表舞台から姿を消して、その後は議論を展開することがなかったのもその理由として挙げられる。そして、そのニーズに応えたのが現代日本社会におけるスピリチュアリティだった」(p. 179)

5 具体的コンテンツの分析

5.1 子宮系 (2章)

「子宮」に神聖性や神秘性を見出す発想 (p. 47)。「努力型」「開運型」の2類型があるが、いずれも明るく前向きな内面をもつ「女性らしさ」を称揚する点が共通する。

努力型

各種ムック、仁平美香 (ヨガ講師)、井上清子 (子宮セラピスト)、若杉友子 (野草料理研究家) などの著作 (pp. 52-63)。

- 前向きな内面を培うことが子宮に聖性を付加する
- 科学的データ (「卵子の老化」など)、医師の積極的関与
- ヨガ、マッサージ、布ナプキン、「温活」、月経血コントロール、マクロビオテックなどの具体的方法の提示

進純朗 (産婦人科医) 『子宮力』 (2014年、日本助産師会) の主張 (pp. 63-65) :

- 西洋医学に基づく妊娠・出産過程の解説
- 「宇宙と交信」する臓器
- 医療への盲信を捨てる「自然なお産」
- 理想像としての「昔の女性」

開運型

子宮委員長はる (ブロガー) の著作 (pp. 66-70)。

- 「子宮は女性にとっての人格全体の中核」
- 「努力」を否定するという逆張り (従来の「子宮系」著作に対して)
- 医学的な臓器イメージは一切ない
- 「子どもを産んでも自分を中心にすべし」
- 罪悪感を抱えずに生きることの重要性
- 「呪いを解くのは私自身」

5.2 胎内記憶 (3章)

子供自身が「かみさま」と相談して母親を選んだり、神秘的な体験をしたりした記憶を語る (p. 77)。1970年代以降の「胎教」ブーム (と医学との結びつき) を前史とする。

池川明 (産婦人科医) の著作 :

- 妊婦のリラックスと胎児への働きかけ
- 「中間生」「過去生」などの記憶
- 母親の失敗を子供が「許す」エピソード

- 流産や死産でも適用される
- 母親の「自らを主人公とした物語」
- 母親を無条件で肯定
- 父親は必ずしも必要でない

池川は、自身の主張を積極的に押し出してはいない。社会状況や心性を読み解き、スピリチュアリティに接続させる「マーケッター」としての役割を担っている (p. 110)。

5.3 自然なお産 (4章)

産婦人科医・助産婦による著作が多い。欧米からの翻訳書もある。

- 医療の介入への反発
- 出産体験や新生児の神聖視

吉村正 (産婦人科医)

- 文明化した社会に対する批判
- 「周産期死亡を減らそうと思うこと自体が神に対する反逆です」 (p. 132)

「自然なお産」とホメオパシー (由井寅子)

- 淘汰は自然の摂理 (p. 137)
- マザーリングは人生の修行 (p. 138)

日本の「自然なお産」の (海外と比較した) 特徴：

- 「痛みや苦しみを乗り越えて「母親らしさ」「女性らしさ」をつかみ取る」ための手段 (p. 143)
- 「生命の選別を許容する優生思想的な傾向」 (p. 143)
- 「フェミニズムの捨象」 (p. 144)

6 議論 I: 科学と技術

フェミニズムにおいてもスピリチュアリティにおいても医療は批判の対象である。しかしそのときに批判される「医療」とは、自然を管理したり人体を侵襲したりするような側面、つまり技術 (technology) とした側面を指すのではないか。また、なぜ批判されるかといえば、つぎのような理由によるのではないか。

- (1) 高度な技術は専門家や政府、企業などが独占するので、個人がコントロールできない
- (2) 介入の結果として、自然や人体に損害があったり、本来あるべき姿から外れたりする

たとえば「卵子の老化」と呼ばれるものは、それ自体はただの知識であり、知ったからといって何か起きるわけではない。この知識を使って対策をとるとしても、「35歳までに子供を持つ」「基礎体温を毎日測定してタイミングを計る」というようなものであれば、それは個人がコントロールすることであるし、直接的な損害が出るとも考えにくい(変性したたんぱく質を元に戻すために細胞に操作を加えるような技術が使われれば話は別であるが)。

ほかにも、最新の栄養学で「妊婦は〇〇をたくさんとるとよい」というような研究成果が出てくれば、スピリチュアリティの書き手はそういう知識をとりあげそうに思う。もし〇〇が人工的な薬品であれば批判の対象になるかもしれないが、通常の食品であれば肯定的に紹介されそうである。

そのように考えると、科学知識を応用する侵襲的な医療(技術)に対して批判的であることと、医療を支える科学知識自体を尊重することは両立するのではないか。

7 議論 II: 切り捨てられたのは何か

フェミニズムが切り捨てられている、ということには、3つの側面がある：

- 書き手がフェミニストでない
- 書いてある内容がフェミニスト的でない
- それを読んでもフェミニスト的行動につながらない

この現象を論じるには、スピリチュアリティ市場で売買されるのが細切れの「コンテンツ」であり、まとまった政治的主張を実現しようとする「言論」ではないことをまず念頭に置く必要がある。書き手は市場で売れる商品を開発して売り込むのだから、自分の信念にこだわるのは不利であり、受けることなら何でも書く節操のない書き手のほうが有利である。

その状況で「フェミニズムが切り捨てられている」ということは、おそらくつぎのようなことである：

- フェミニスト的な内容を書いても売れない
- もし売れたとしても、集合的な政治行動につながるわけではない
- したがって、政治的主張を展開したいフェミニストにとって魅力的な媒体ではない

「フェミニズム」のかわりにほかの政治的主張を入れても同様であろう。読者は自分にとって心地よい内容のコンテンツを選択して購入し、私的世界でのみ利用するのだとすれば、そこに公共的な言論を持ち込む意味はあまりない。市場からのサインを読み取って売れる著作を書く、池川明のような行動が合理的である。また、著作に一貫した主義主張があるようにみえるとしても、それは顧客に向けて演出されているキャラクターだということもありうる。

そのような構造で「言論」が生じることが忌避されているのだとすれば、排除されているのは「政治」だといふべきなのではないだろうか。

言論としてではなく消費財としてフェミニズムの受けが悪いとすれば、それは興味深い。しかしそういうことを主張するには、今回のデータ収集と分析の方法は粒度が粗すぎるのでは？

8 議論 III: 欧米と日本との差異について

欧米と日本のスピリチュアリティが置かれている状況には、政治的な前提の大きなちがいがあるはずなので、そこを飛ばして比較はできないのではないかと。

ひとつには、人工妊娠中絶の法的な位置づけが異なるということがある。日本ではリプロダクティブ・ライツに関する危機感がほとんど共有されていない点で、中絶が非合法であったり、規制の厳しい社会、規制が強化される現実的な可能性がある社会とは、前提がちがいそうである。

もうひとつは、日常的な政治志向が、日本では非常に低いのではないかとということ。特に、1980年代以降に政治的無関心が強まり、非政治的な消費志向が社会を覆ったあとの2000年代に発生した現象を分析している、というタイミングの問題が重要なのではないだろうか。

文献

橋迫瑞穂 (2021) 『妊娠・出産をめぐるスピリチュアリティ』 (集英社新書) 集英社.